

Title	機能とフォルム : "Der moderne Zweckbau"における対立の論理
Author(s)	山本, 一貴
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53307">https://doi.org/10.18910/53307</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 機能とフォルム

### — “Der moderne Zweckbau” における対立の論理 —

山本一貴／神戸大学

はじめに、

本研究は、ドイツの建築ならびに芸術批評家、Adolf Behne (1885-1948) の建築理論を、彼の一連の著作の中で大きな転換期に書かれたものの一つ、“Der moderne Zweckbau [現代的な有目的建設]” (執筆; 1923年, 出版; 1926年) を通して、明らかにしようとするものである。

この書は、建設活動 [Bauen] の本質規定及びその生成的発展に関する、弁証法的論理を用いた試論である。なお、ここで扱われているのは、1890年代から1920年代までのドイツを中心とするヨーロッパならびにアメリカの建設芸術 [Baukunst] であった。つまり Behne は、近代建築が確立する以前に、新しい建築の方向性を論理的に唱えていたのである。

本発表では、この書の内容に触れながら、対立の論理という観点から、Behne における「機能とフォルム」の在り方について検証した。

#### ◇ 均衡 [Gleichgewicht]

Behne は、『序文』において、建設 [Bau] の本来的な性格に、「实际的なもの」ないし「機能・目的」に立脚する道具としての相対性と、「人間の遊戯本能という気持ち」ないし「フォルム」に立脚する遊具としての絶対性との「均衡」を見いだした。さらに、建設活動の発展は、融通の利きにくくなったフォルムを投げ棄て、目的や機能へ引き返すことによって、つまりフォルムの見解から機能的見解へ踏み出すことによって繰り返された

らされてきたものとした。

20世紀に至るまでの数世紀間、建設芸術家にとってはフォルムとしての建設、つまり Formbau が、対立的に技師や技術者にとっては Zweckbau が問題であった。だが、建設芸術家が「合目的性の美」を賞賛して以来、どれもが Zweckbau と呼べるようになってきた。そこで Behne は、“Der moderne Zweckbau” として書き換えることによって、建設全体の把握を試みると同時に、より良い均衡への移行のプロセスを、すなわち建設活動の発展を対立の論理から特徴づけようとしたのである。

#### ◇ もはやPではない／むしろQである

Behne は、「本文」を3つの章で構成し、それぞれに一貫して「もはやPではない／むしろQである」というタイトルをつけている：第1章「もはやファサードではない／むしろハウスである」、第2章「もはやハウスではない／むしろフォルム化された空間である」、第3章「もはやフォルム化された空間ではない／むしろゲシュタルト化された現実である」

『第1章』は発展の発生段階を示す。Berlage, Messel, O. Wagner が、都市の新しい生活に伴う課題（証券取引所、百貨店、駅舎）を通して、歴史的様式を外壁から取り除き、すなわちファサード概念を棄て、「ハウス」概念に至るまでに目的へと引き返してきたことを示すとともに、対比的に F. L. Wright が、「住まう」という生活の根源的な機能から、郊外住宅に取り組んできたことを示した。

『第2章』は発展の進行段階を示す。産業上の建設の課題を通して、Behrens や Gropius などが、その制作過程の組織化に取り組んできたことを示すとともに、対比的に van de Velde についても分析している。そしてようやく Mendelsohn において、ハウスのタイプが崩壊し、空間の連なりが重要になってきたことを明らかにした。

『第3章』は、最も重要で、これからの発展の方向性を示す。大戦後の変革した社会における、建築家たちの現在の活動とこれからの課題が示されている。ここでは合理主義と機能主義が対立する立場におかれる。なおそれぞれの代表的な建築家として、合理主義に Le Corbusier が、機能主義に Häring や Scharoun などの所謂ドイツ表現主義者が扱われている。だが Behne はどちらの考え方にもその限界を感じている。というのも、一貫した合理主義者はフォルマリストに、一貫した機能主義者はロマンティストに陥る危険を孕んでいるからだ。

したがって、Behne は次のような結論に至っている：「われわれにはあらゆる建設活動が、目的とフォルムとの間、個別体と社会との間、経済と政治との間、動態と静態との間、専一性と均一性との間、実体と空間との間の、妥協の性格を含んでできるように思える。」

#### ◇ 相互浸透 [Durchdringung]

そこで、そのような妥協を認めざるを得ない建設活動にたいして、Behne は対立する要素の「相互浸透」を求めた。

それは国家間の関係にまで展開し、静的な社会構造をもつフランスと動的に社会を構築するロシアとの間で、地理的にもその間にあるドイツはどうふるまうべきかと問われている。なお、ロシアの建設芸術はダイナミズムと名づけられている。

この役割を Behne は機能主義に求めた。美学的空間ではなく生の空間をめざして、機能への厳密な適合を行うことによって、建設活動の発展にとって新しい始まりを与え、安定した均衡（対称性）を不安的な均衡（両極性）へと導いた点では高く評価されるのだが、その個別主義的な姿勢は克服されなければならない問題として指摘される。それは Messel, Behrens, Mendelsohn に繰りかえし見られてきたドイツ特有の「尖鋭的な」態度でもある。それは現行の概念を否定するかのような錯覚を与え、その心理的作用は建設活動の発展を動かすものなのだが、Mendelsohn を例外として、自らは次の段階に到達できずにいた。それと同様のことが機能主義者にも当てはまってしまうことを Behne は危惧するのである。

したがって、Behne は彼らに社会的立場（特に“一緒に [Zusammen]”の立場）からも取り組むことを求め、ロマンティストに陥らないように「ラティオを基礎とする技法から一元性を解決しなければならない」と求めるのである。

おわりに、

このように、あらゆる要素を対立するものに分類し、再びそれらを秩序づけることによって、統一的な把握を求めることは、この書を貫く論理であると同時に、「ゲシュタルト化された現実」の理念に通じるものである。

ゆえに、「機能とフォルム」の相補的關係から、Behne が建築の持つべき予見を考察していることは、当時のドイツ建築思潮に対する重要な見方であり、さらにモダニズムを補完し得る可能性があるという意味で、今もなお重要であるといえるだろう。